

尤侗『擬明史樂府』譯注（四）

福本雅一監修・尤侗研究會譯注

凡例

- 一、底本は、『叢書集成續編』所收の『明史樂府』一卷（光緒二十一年・宋澤元校刊本・懋花庵）に基づいた。
- 二、譯注は、解題・尤珍注・資料・詩・語釋・通釋の順で並ぶ。
- 三、尤珍注に對する語釋は（ ）内に記した。
- 四、換韻位置は、訓讀の下に」で示した。

15 遜國怨

靖難の役で敗北した建文帝の逃亡を歌う。

太祖朱元璋は、軍事の才能ある第四子朱棣（燕王→永樂帝）に皇位を譲りたいと考えたことがあったようだが、既に長男朱標を皇太子に立てていた上、馬皇后の諫めもあって斷念し

た。朱標が急死したときも、燕王ではなく、長子相續の原則に従って、朱標の子允汶を皇太孫に立てたのである。洪武三十一年（一三九八）、皇太孫が即位して建文帝になると、燕王をことあるごとに牽制した。

そして靖難の變が勃發する。この變の詳細は16「兩日捷」解題に譲るが、四年に及ぶ戦いの末、首都南京の陷落によって燕王が勝利した。建文帝は皇城の兵火の中で崩じたと考えられているが、地下道を通して逃れ、僧の姿に身を變えて生き延びたとする説もある。本詩は建文帝生存説に立っている。

建文四年（一四〇二）六月、南京落城が確實となり、自決しようとした建文帝のもとに王鉞が進み出て、「太祖が緊急時に開けと遺言なされた箱があります」という。それを開けると、度牒三張と僧衣、剃刀が入っていて、逃走経路まで詳

中國詩文論叢 第二十四集

細に書かれてあった。建文帝は剃髪して僧に身をやつし、數人の侍臣と共に、雲南の永嘉寺へと身を匿した。

建文帝の出亡から三十九年たった正統五年（一四四〇）、建文帝と名乗る僧が思恩州の長官岑瑛の前に現れた。彼は帝とともに寄寓していたことから、事件が発覺し、捕われた一行が北京に送られた。本人確認のために呼ばれた吳亮が、建文帝の左足を見ると、そこにはくろががあった。建文帝本人である證據だった。吳亮は顔を上げることが出來ず、退いて自縊した。建文帝は西宮に迎えられ、「老佛」と呼ばれ、亡くなると西山に葬られたという。

建文帝の出亡については幸田露伴『運命』に詳しい。この詩については福本雅一編『中國の名詩鑑賞9』（明治書院、一九七六年）に詳細な譯注があり、本詩の譯注はこれを踏襲している。

〔尤珍注〕

建文帝、頭顱（頭蓋骨）偏なり、太祖之を撫して半邊月兒と曰う、金川守を失う、内臣の王鉞太祖の遺篋を捧じて至る、度牒・衣帽有り、遂に披剃して出亡す、正統五年、廣西の思恩府に至り、自ら陳じ、送られて京に至る、太監の

吳亮に命じて驗視せしむ、帝曰く、吾れ昔便殿（天子が休息する別殿）に御して子の鷺を食らい、片肉を地に棄つ、汝手づから壺を執り、地に據って之を飮う、尙お記するや否やと、亮地に伏して慟哭す、歸りて自ら縊る、乃ち迎えられて西内に入り、老佛と稱さる、没して西山に葬られ、封ぜず樹せず、

〔資料〕

『明史紀事本末』卷一七・建文遜國、明黃瑜『雙槐歲鈔』卷二「詠初月」、福本雅一編『中國の名詩鑑賞9』（明治書院、一九七六年）、『日本近代文學大系6 幸田露伴集』所收『運命』福本雅一注釋（角川書店、一九七四年）

遜國怨

半邊月兒雲中落	半邊月兒	雲中に落つ
四年天子作行脚	四年の天子	行脚を作す
度牒縮衣遺篋藏	度牒 縮衣	遺篋に藏す
我家故物還皇覺	我が家の故物	皇覺に還さん
魚服蒙塵數十秋	魚服 蒙塵	數十秋
從亡義士幾人留	從亡の義士	幾人か留まる
新浦細柳年年恨	新浦 細柳	年年の恨み

斷雁哀猿處處愁

聞說新朝三易主

蕭然白髮投蠻府

山河錦繡屬他家

猶戀首丘一抔土

昔日朝班侍從稀

故宮阿監獨沾衣

西風怕上朝元閣

南望傷心見燕飛

我謂老僧歸來誤

燕山不是鍾山樹

蒼梧雲密蜀江深

何地不藏舊君墓

斷雁 哀猿 處處に愁う

聞説らく 新朝 三たび主を易うと

蕭然たる白髮 蠻府に投ず

山河 錦繡 他家に屬するも

猶お戀う 首丘 一抔土

昔日 朝班 侍從稀なり

故宮の阿監 獨り衣を沾す

西風 上るを怕る 朝元閣

南望 傷心して 燕の飛ぶを見る

我れ謂う 老僧 歸り來たるは誤てりと

燕山は 是れ鍾山の樹ならず

蒼梧 雲 密にして 蜀江深し

何れの地にか 舊君の墓を藏せざる

半邊月兒

建文帝のこと。建文帝の頭蓋骨は出生時歪んでい

たため、太祖朱元璋は、その頭を見て、内心この子は良い

死に方はしまいと憂い、頭を撫でて半邊月兒と名づけたと

いう。明黃瑜『雙槐歲鈔』卷二「初詠月」に見える逸話。

雲中落

雲の中へ天から落ちる。天子の位を失う、の意味で

あるが、ここでは建文帝出亡の地である雲南を意識してい

ると思われる。

四年天子 建文帝のこと。在位年数が四年だったため。東晉

の孝武帝の、「世豈に萬年の天子有らんや」をふまえてい

う。

行脚 僧が諸國を巡って修行すること。『古尊宿語錄』卷六

に、「老僧三十年來行脚して、未だ曾て此の一問を置かず」

とある。

度牒 僧や道士となる際に官が與える許可證。『雲麓漫鈔』

卷四に、「紹興中、軍旅の興るや、用度に急にして、度牒

の出に節無し」とある。

緇衣 墨染めの衣。僧衣。韋應物「秋景詣琅邪精舍」に、

「悟言す緇衣子、蕭灑なり中林の行」とある。

遺篋 朱元璋が一大事の起きたときに開くようにと傳えた鐵

の篋。奉先殿の左にあり、中には朱元璋の度牒と緇衣が入っ

ていたという。

皇覺 安徽鳳陽の南にある寺。太祖朱元璋が僧になった寺。

『明史』太祖紀一に、「太祖 孤にして依る所無く、乃ち皇

覺寺に入りて僧と爲る」とある。1「朱家巷」参照。

魚服 白龍魚服の故事により、貴人が賤者の服裝をすること。

微服。『說苑』正諫の「昔白龍 清冷の淵を下り、化して

中國詩文論叢 第二十四集

魚と爲り、漁者豫且 其の目を射る」に基づく故事で、貴人が微服した際に難に遭うこと。

蒙塵 天子が出奔して風塵を蒙ること。『左傳』僖二四に、「天子 塵を外に蒙り、敢えて奔りて官守に問わざらんや」とある。

數十秋 建文帝が建文四年（一四〇二）に南京城を逃れ、正統五年（一四四〇）に捕るまでの三十九年間のことを言う。

從亡義士 建文帝が出亡する際つき従った臣下。史彬・楊應能・葉希賢などを指す。

新浦細柳 次に掲げる建文帝の七律の尾聯「新浦細柳年年綠なり」に基づく。この句は杜甫「哀江頭」の「新浦細柳誰が爲に綠なる」をふまえる。本詩は、この建文帝の七律をふまえるところが多い。『明史紀事本末』所引の詩をここに掲げる。

牢落西南四十秋 西南に牢落す 四十秋
蕭蕭白髮已盈頭 蕭蕭たる白髮 已に頭に盈つ
乾坤有恨家何在 乾坤 恨み有り 家何くにか在る
江漢無情水自流 江漢 情無く 水自ら流る
長樂宮中雲氣散 長樂宮中 雲氣散じ

朝元閣上雨聲收 朝元閣上 雨聲收まる
新浦細柳年年綠 新浦細柳 年年綠なり
野老吞聲哭未休 野老 聲を呑み 哭して未だ休まず

この詩の二・六・七句がそれぞれ本詩の一〇・七・一五句に對應している。

斷雁 列から離れた雁。劉禹錫「秦娘歌竝引」に、「斷雁哀猿 風雨の夕」とある。

新朝 新しい王朝という意味ではなく、建文帝のあと、叔父燕王の直系の子孫によって皇統が保たれたこと。

三易主 燕王が永樂帝として即位したあと、仁宗・宣宗・英宗と三度皇帝が代わっていること。

蕭然白髮 前掲の建文帝の七律の首聯「蕭蕭たる白髮 已に頭に盈つ」とあるのを意識する。

蠻府 蠻は南方異民族の蔑稱。ここでは、帝が雲南・貴州を遍歴したこと。府は役所。押韻の字に用いただけで、別に意味はない。

山河錦繡 錦繡は、あやぎぬ。またこの一句は、杜甫「清明」二首・其二の結句「漢主 山河 錦繡の中」をふまえる。
屬他家 燕王に帝位を奪われたことをいう。

首丘 狐が死ぬ際、首を住んでいたところに向けることから、

轉じて故郷に歸葬することを言う。『禮記』檀弓上に、「古の人 言有り、曰わく、狐死して、丘に首を正すは仁なり」とあり、孔穎達の疏は「首を正して丘に嚮かう所以の者は、丘は是れ狐の窟穴根本の處にして、狼狽して死すと雖も、意は猶お此の丘に嚮かうなり」と説く。

一抔土 一掴みの土。陵墓をいう。『史記』張釋之傳に、「假令い愚民 長陵の一抔土を取るも、陛下 何を以て其の法を加えん乎」とある。

獨沾衣 吳亮の行爲を指す。この一句は白居易「長恨歌」の「君臣相い顧りみて盡く衣を沾らす」を意識する。

朝班 朝廷での百官の席次。朝列ともいう。杜甫「秋興八首」其五に、「幾廻か青瑣にて朝班に點ぜらる」とある。

侍從 貴人に仕える官。楊應能、葉希賢、程濟らを指す。

阿監 宮女を掌る宦官。ここでは太監吳亮のこと。

西風 西から吹く風。秋風。この句は宋杜常「過華清宮詩」の一句「朝元閣上 西風急なり」をふまえる。

朝元閣 唐代の道觀。老子を祀る。前掲建文帝の詩句に「朝元閣上 雨聲收まる」とある。

見燕飛 燕王の血筋のものが權力の座にあること。『明史紀

尤侗『擬明史樂府』譯注（四）（福本・尤侗研究会）

事本末』卷一六に、道士の歌「燕を逐う莫かれ、燕を逐う莫かれ、燕を逐えば日に高く飛び、高く飛びて帝畿に上らん」を引き、燕王が帝位を篡奪する讖をなしたという。

我謂 私は思う。尤侗が自らの見解を述べる。

老僧 僧形に身をやつした建文帝のこと。

燕山 北京。謝肇淛『五雜俎』地部一に、「遼金及び元皆な燕山に都す」とある。

鍾山 南京の東北に聳える紫金山。南麓に太祖朱元璋を葬った孝陵がある。

蒼梧 湖南寧遠の東南。舜が南巡して崩じた所とされる。

蜀江 蜀の河。蒼梧と共に、建文帝の遊歴した地方。

舊君 建文帝。

半月兒建文帝は雲の中に落ちて、

在位四年の天子は僧となつて諸國を巡る。

度牒と墨染めの衣はかたみの箱にしまわれていたが、

これこそわが朱氏傳來のもの、皇覺寺に返さねばならぬ。

粗服をまとして都落ちしてから數十年、

亡命に従つた義士は幾人のこつたのか。

新しく芽ぶいた蒲、細い柳に毎年恨みをまし、

中國詩文論叢 第二十四集

列を離れた雁、哀しげに鳴く猿の聲に到るところで愁いをおぼえる。

人づてにきいた、新しい朝廷は三度も天子が代わったと、しかしわびしい白髪的身は未開の地に赴こうとするのだ。色とりどりに美しい山も河も他人のものとなったが、

なお故郷の父祖の墓が戀しく偲ばれる。

昔の朝臣でおそばに仕えた者もまれだったが、故宮の阿監、吳亮だけは涙で衣を濡らした。

秋風に朝玄閣に登ることを恐れ、

南を眺めて燕の飛ぶのを見ると心が痛む。

私は思う、老僧の建文帝が朝廷に歸られたのは誤りだったと、

北京の山には父祖を葬った鍾山の陵墓の樹はないのだ。

遙か蒼梧の野は雲がたちこめ蜀江は深い、

どの土地でも舊君建文帝の墓をかくしてくれないことはなかったらう。

(石村貴博)

16 兩日捷

建文帝と燕王(後の永樂帝)の戦いである靖難の役を歌う。

建文元年(一三九九)七月に始まった靖難の役は、建文四年(一四〇三)六月、南京城が陥落して燕王の勝利に終わったが、大義の上では建文帝に分があり、燕王が勝利したのは、彼の決斷力と度重なる天變を味方につけたためである。

建文元年(一三九九)八月の雄縣の戦いでは燕王軍が勝利し、白溝河の戦いはほとんど官軍が勝つと思われたが、大風に乗じて燕軍が火を放ち、官軍を撃退した。ここまでは燕王軍が優勢であったが、建文二年(一四〇〇)一二月の東昌の戦いは大敗を喫する。道衍が「師行かば必ず克たん、但だ兩日を費やす耳」と予言した戦いであったが、官軍の盛庸によって燕將張玉を失った。建文三年(一四〇一)の夾河の戦いでは燕將、譚淵が斬られ、燕軍の先頭で黒旗を振っていた張早旗も死んだ。

日が暮れて軍營に引き上げる中で、燕王は十數騎を率いて盛庸軍の近くで野宿をしたのだが、翌朝氣付いてみると四方を盛庸軍に圍まれていた。燕王は敵陣に突入して、かろうじて危地を脱した。これは建文帝が「朕をして叔を殺すの名有ら使むる母^なかれ」という令を出したため、官軍の諸將が手出しできなかったのである。

日の出と共に戦いが再開され、一進一退の攻防を繰り返す。

ていたところ、東北から急に風が吹いた。砂塵が漲り一寸先も見えなくなった。それに乗じて、燕軍が攻撃を仕掛け、盛庸率いる官軍は大敗した。

翌閏三月、官軍の吳傑が盛庸軍に合流しようとしていたところ、盛庸の敗北を知り、眞定(河北正定)に戻ろうとした。それを知った燕王は、眞定の守りが堅いため、吳傑らが戻らないうちに滹沱河で戦った。官軍は雨のように矢を放ち、燕軍は大量の死傷者を出したが、その時屋根が飛び木が抜けるほどの大風が吹き、燕軍がこれに乗じて吳傑軍を破った。夾河、滹沱河と續いた大風が、燕軍に味方して勝利をもたらした。

この後、官軍がもりかえし、建文四年(一四〇二)三月、滹沱河で燕將陳文を取り圍んで自刎させ、四月の小河の戦いで王眞を討った。この敗北で、燕軍は王眞・陳文・李斌を失った。官軍は、燕王が北平に歸ると考え、追撃しなかった。

官軍に食糧が届けられるとの情報が入り、燕軍は、食糧を取りに來た平安軍を襲い、大勝を収めたので、何福らは靈壁に立てこもった。翌日、何福が砲聲三發を合圖に出撃せよと命令を下したところ、偶然にも燕兵が三發砲彈を撃ったため、官軍は誤解して閉じた門に殺到し、人馬が塹壕に落ちるなど

軍内は混亂を極めた。そこへ燕王軍が急襲して、平安を捕らえた。

この靈壁の戦いで大勢が決し、燕軍は建文四年(一四〇二)六月、南京城を攻め落とした。建文帝は落城の際、「宮中火起り、帝 終わる所を知らず」『明史』恭閔帝紀」と記すが、兵火の中で崩じたとも、僧の姿で脱出したともいう。前詩15「遜國怨」参照。

燕王は七月に即位し、翌年永樂帝となった。方孝孺に即位の詔敕を書かせようとしたが、肯んじなかったため族刑に處した。族刑とは、本人のみならず彼の一族を皆殺しにする刑である。八七三人が殺されたという。

〔尤珍注〕

道衍 燕王に謂いて曰く、師行かば必ず克たん、但だ兩日を費やす耳と、東昌に至って盛庸の敗る所と爲る、兩日は昌なり、小河の戦い、平安 其の將王眞を斬る、夾河の戦い、庸 其の將譚淵を斬る、忽ち東北風大いに起り、塵沙 天に漲り、軍中昏暗にして、咫尺も辨ぜず、燕兵 風に乗じて縦撃し、庸 敗走す、阜旗の張 死せり焉、張は力千斤を挽き、每戦 阜旗を麾きて先登す、死するに至って植立して仆れず、文皇(燕王) 十余騎を以て庸の營に迫って野

中國詩文論叢 第二十四集

宿し、明旦、馬を引き角を鳴らし、營を穿ちて去る、諸將相
い顧みて、敢えて一矢も發せず、上に旨の、朕をして叔父を
殺すの名を負わしむる無かれと有るを以てなり、

〔資料〕

『明史』卷四・恭閔帝紀、卷一四四・盛庸・平安傳、『明史
紀事本末』卷一六「燕王起兵」、明屠叔方『建文朝野彙編』、
明鄭曉『吾學編』、明曹參芳『遜國正氣紀』卷八・後死列傳・
盛庸・平安傳、寺田隆信『永樂帝』（人物往來社一九六六年
三月・中公文庫一九九七年二月）

兩日捷

兩日捷 有盛庸
小河戰 保兒功
阜旗一麾誰當鋒
忽然天半飛狂風
發屋拔木捲沙礫
睢水昆陽將無同
紫髯騎馬穿營過
諸將不敢彎雕弓
無使朕負殺叔名

兩日の捷 盛庸有り
小河の戦い 保兒の功
阜旗 一たび麾^{さしほ}げば 誰か鋒に當たらん
忽然として 天半 狂風飛び
屋を發し 木を抜き 沙礫を捲く
睢水 昆陽 將^はた同じきこと無からんや
紫髯 馬に騎^のりて 營を穿ちて過^よぐるも
諸將 敢えて雕弓を彎^ひかず
朕をして叔を殺すの名を負わしむる無か

咄哉何似梁湘東

咄なる哉

梁湘東に何似^{いかん}

「れ

兩日捷 二つの日、即ち昌の字。東昌を指す。山東聊城。捷

は勝利。建文二年（一四〇〇）十二月、東昌で南軍が燕軍
に勝った戦いを指す。燕軍の出兵にあたって、燕王の謀臣
姚廣孝（道衍）は、「師行かば必ず克たん、但だ兩日を費
やす耳」と告げた。東昌での敗北の後も、「兩日は昌なり、
此れ自り全勝せん矣」と鼓舞した。

盛庸（？—一四〇三）はじめ耿炳文に従い、その後、李景隆
の軍に加わって燕軍と戦った。のち戦功により歴城侯に封
じられた。鐵鉉（17「鐵尚書」參照）とともに山東の濟南を
守り、東昌の役では燕軍の大將張玉を討ち、夾河の戦では
同じく燕將譚淵を斬るなどしばしば戦果を立てた。しかし
その後建文四年（一四〇二）には靈璧・浦子口・高資港と
轉戦し盡く敗れた。南京陷落の後には投降し、彈劾を受けて
爵位を削奪され、急死した。傳は『明史』卷一四四。

小河戰 小河は睢水の明代の呼稱。河南開封の東南から發し
て東流し、安徽宿州の北を通って淮河に注ぐ。建文四年
（一四〇二）三月から四月、燕軍と南軍は宿州付近、小河と
南の淝河周邊ではげしく戦った。南軍は燕の驍將陳文、王

眞を討ち、さらに平安は燕王をあわやのところまで追いつめた。尤珍注には「小河の戦い、平安 其の將王眞を斬る」とあるが、王眞は淝河の戦いで敗れて自刎したとする説が多い。『明史』恭閔帝紀および王眞傳などはいずれも、同年三月、平安が淝河で待ち伏せしていた燕將の白義・王眞・劉江と戦って王眞を自刎せしめ、四月の小河の戦いで陳文を討ったとする。なお、『吾學編』には平安が小河の戦いで王眞を斬ったとの記述が見え、『明史紀事本末』燕王起兵には、平安が小河の戦いで陳文を斬ったあと、轉戦して王眞を取り圍んで自刎させたとある。

保兒 平安（？—一四〇九）の小子。安徽滁州の人。太祖朱元璋の養子となり、靖難の役では耿炳文・李景隆に従い、しばしば燕軍を破った。建文四年（一四〇二）四月の小河の戦いでは燕王に迫ったが、目前で馬がつまづき、討ち果たすことができなかった。その後靈璧で敗れて燕兵に捕われた時、もし馬がつまづかなければどうするつもりであったか、と燕王に尋ねられると、言下に「殿下を刺すこと朽を推くが如き耳」と答えた。燕王は「高皇帝 好く壯士を養えり」と嘆息して平安を殺さず北平に送り、即位後、北平都指揮使に任じた。永樂七年（一四〇九）成祖が北京に

尤侗『擬明史樂府』譯注（四）（福本・尤侗研究会）

やってきた時、側近に「保兒は恙無きか」と尋ね、それを聞いた平安は恥じて自縊した。傳は『明史』卷一四四。

早旗 早旗は、黒い旗。都指揮の早旗張を指す。戦に臨んで常に黒旗をふるって先頭に立ち、燕軍は畏れて「早旗張」と呼んだ。夾河の戦いで戦死したが、死んでなお旗を持ったまま倒れなかったという。傳は『明史』卷一四二。

誰當鋒 だれもその矛先にかないうるものはいない。『三國志』吳志・孫策傳に「向う所皆な破り、敢えて其の鋒に當たる莫し」とある。

天半 中空。『太平廣記』神仙二六に「其の法將に成らんとすれば、海水雲の如く、卷かれて天半に在り」とある。

飛狂風 狂風は、強風。白溝河、夾河、滹沱河の戦いではいずれも強風が吹き、燕軍に味方した。

發屋一句 家屋を吹き飛ばし、樹木を引き抜き、砂をまきあげる。大風の形容。『漢書』高帝紀第一上に「是に于いて大風 西北従り起り、木を折り屋を發し、沙石を揚げ、晝に晦し、楚軍大いに亂れ、而して漢王數十騎と與に遁れ去るを得たり」とある。建文三年（一四〇一）の滹沱河の戦いでも「屋を發して樹を拔」くような（『明史紀事本末』）大風が吹いたのに乗じて、燕軍が盛庸らを破った。

中國詩文論叢 第二十四集

睢水 前注小河と同じ川。劉邦は彭城（徐州）で項羽に敗れ、南下して川まで追いつめられ、漢軍の死者で流れがせきとめられた、と言われるほどの大敗を喫した。しかし劉邦が數十騎のみで逃れると、突如として西北から大風が吹き、無事味方に合流できた。前注參照。

昆陽 河南葉縣。後漢の劉秀（後の光武帝）が王莽の軍を破った場所。王莽に對して兵を挙げた劉秀は、昆陽で王邑ら率いる王莽の軍に圍まれたが、わずか十三騎で脱出、勇兵三千を集めて城外から王莽軍を攻撃した。内外が呼應し、戦況有利となったところで、おりしも大風と雷雨が起こり、これも劉秀に味方した。王莽軍は壊滅、さらに逃げるところに付近の川の堰が切れ、多數の溺死者を出した。王邑らは兵士の屍を踏んで逃げのびたという。『後漢書』光武帝紀第一上に見える。前注と合わせ、天變が味方して勝利した戦いの前例として挙げられる。

將無同 同じでないことはない。晉の阮瞻は儒教と老莊の教えの異同をたずねられて、ひとこと「將無同」と答え、拔擢された。『晉書』卷四九・阮瞻傳に見える。

紫髯 赤茶色のおおひげ。しばしば西域の胡人の外見をいう。『三國志』吳志・孫權傳の裴松之注に引く『獻帝春秋』に

「向^さきに紫髯の將軍有り、長上にして短下、馬に便^よれ射を善くす、是れ誰ぞ」とある。ここでは燕王（成祖）を指す。『明史』成祖紀一に「王の貌は奇異にして、美髯あり」とある。

穿營 敵陣を突つ切る。建文三年（一四〇二）の夾河の戦いで、燕王が盛庸の陣營近くに十數騎で野宿したところ、夜が明けてみるとそこは敵陣の中であつた。しかし燕王はあわてず陣を突つ切つて逃れた。『明史』成祖紀一に「（燕王）乃ち從容として馬を引き、角を鳴らし營を穿ちて去る」とある。

雕弓 文様の彫りこまれた弓。司馬相如「子虛賦」（『文選』卷七）に、「左烏之を雕弓と號し、右夏之を勁箭に服す」とある。後注の詔のため、陣營を突つ切る燕王に將軍たちは矢を放つことができなかった。『明史』成祖紀一に「（諸將）倉卒として相い顧みて愕眙し、敢えて一矢も發せず」とある。

無使朕負殺叔名 建文元年（一三九九）七月、北伐の軍が出兵する際、建文帝は令を出し、「朕をして叔を殺すの名有ら使むる母かれ」と命じたという。

咄哉 咄は舌打ちの音。白居易「自詠」に、「咄なる哉箇の

丈夫、心性何ぞ墮頑なる」とある。

何似 何如。ここでは反語として不如の意。李白「書懷贈南陵常贊府」詩に「君看よ我が才能、魯仲尼に何似」とある。

梁湘東 梁の元帝蕭繹（五〇八―五五四）。梁武帝の第七子。

天監十三年（五一四）湘東王に封ぜられた。天寶三年（五五二）陳霸先と同盟して侯景を討ち取り、兄・簡文帝の後を継いだ。承聖三年（五四四）西魏の來襲を受けて殺された。

『明史紀事本末』卷二六には、北伐に際し、建文帝が以下のような命令を諸將に下したという記事が見える。「帝諸將士に誡めて曰く、昔蕭繹兵を挙げ京に入りて、其の下に令して、一門の内、自ら兵威を極めよと曰うは、不祥の極なり、今爾輩將士燕王と對壘するも、務めて此の意を體し、朕をして叔父を殺すの名有ら使むる冊かれと」。

この話は、蕭繹が帝位への野望のため、簡文帝の三人の皇子を殺させたことを指し、その際、彼が「六門の内、自ら兵威を極めよ」と暗殺を示唆した故事をふまえる（『資治通鑑』梁紀二〇・承聖元年）。「六門」とは南京の六つの城門を指し、都城内という語であるが、『明史紀事本末』は「一門」としている。

ここでは建文帝と蕭繹を比較し、帝位のために敢然と親族を殺した後者を前者は批判したが、それは宋襄の仁だったのではないかという。

東昌の勝利に、盛庸がおり、小河の戦いは、平安の功績。

黒旗が一たびふるわれれば、誰がその鋒に當たるだろうかとつぜん中空に強風が吹き荒れる。

家屋を飛ばし、木を引き抜き、砂礫を巻き上げるのは、睢水や昆陽の戦いと異なるところがない。

紫髯の燕王が馬に乗り 敵陣を貫いて通り過ぎたが、諸將は敢て弓を引こうとはしなかった。

「朕に叔父殺しの悪名を負わせるな」とは、ちよっ 梁の元帝に比べてどうか。

（石村貴博）